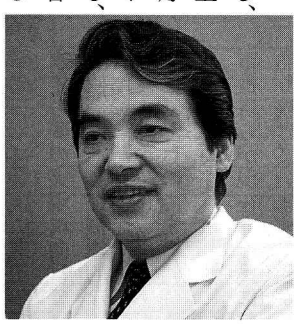
インタビュー★ルーム（730）

菅波茂さん（六二）
AMDAグループ（岡山市）代表
中国、ミャンマーで医療支援

岡山市に本部がある国際医療非政府組織（NGO）「AMDA（アムダ）」は、世界二十九カ国に支部を有し、これまでに約五十カ国で百回以上の緊急救援活動を実施。今年五月に発生したミャンマーの大型サイクロン、中国四川省の大地震でも、現地の医師や看護師らと協力しながら、被災地の巡回診療などを迅速に開始した。アスカ国際クリニック院長として地域医療に携わりながら、国際医療支援活動に当たる菅波茂・AMDAグループ代表に中国、ミャンマー両国での現在の活動などについて聞いた。



――両国での緊急救援は。

「今回の特徴は①海外からの緊急救援を両国政府が規制している②AMDAの過去の活動実績が基になった③日本単独でなく国際ネットワーク組織だからできた――という三点。ミャンマーでは十年以上前から母子健康増進プログラムなどを実施し、政府と信頼を築いていた。協力関係にある現地の医師が、被災地の巡回診療を開始し、そこに日本人職員が入った。一方、中国では雲南大地震当時からのパートナーがおり、中国人医師がいち早く活動を始め、台湾支部からも医療チームを送った。厳しい規制の中、大きなNGOでもゼロからの救援活動は簡単でない。『いざ鎌倉』に備えて、普段から人的ネットワークを維持するのが大切だ」

――多国籍で活動できる理由は。

「われわれの活動の理念は『相互扶助』。共同体として『困ったときはお互いさま』という考え方でアジア、アフリカ、中南米など世界の八割が理解できるものだ。残りの二割は個人主義に価値を置いている。相互扶助が世界で通用する背景には、被災者からの『あなたは、なぜわたしを助けるのですか』という問い掛けがある。チャリティーでは相手の気持ちは二の次となるが、お互いさまという姿勢なら、援助を受ける側の尊厳、プライドを保つことができる」

――岡山発の国際貢献の意義を。

「NGOはどこでも設立できるが、地域による特質はある。岡山は医療、教育、宗教の三つに対する感受性が非常に高い土地柄。阪神・淡路大震災でのボランティア活動を見ても分かるように、弱者が存亡の危機にひんしたときに動ける精神文化がある。一言で表すと『福祉』の気持ちが強い。AMDAの活動に県民が共鳴するのは、それが国境を越えた福祉だから。また、岡山県は二〇〇四年、全国に先駆けて『国際貢献活動の推進に関する条例』を制定した。いわばAMDAの活動を支援するために作られたもので、ありがたい話だった。NGOは法律や条例を制定できず、岡山はNGO支援の先進県と言える」

――今後の中国、ミャンマー支援をどう進めるか。

「今われわれが考えているのは、被災者の心の後遺症（トラウマ）のためのプログラム。現地の人材を教育するため、現在、カナダ支部から専門家を派遣する準備を進めている。あとは、骨折や打撲後の理学療法に関するトレーニングを、可能ならば現地から岡山に呼んで実施しようと思う。AMDAができる救援活動は、医療という人的サービスに尽きるだろう」

（聞き手　平岩貴比古＝岡山支局）